

# 青年期におけるアイデンティティの様相について

## — 個と関係性のアイデンティティ及び価値観との関連から —

桃 井 洋 輔

本研究は青年期におけるアイデンティティの様相及びその性差を調査するため、個に基づくアイデンティティ及び関係性に基づくアイデンティティと価値観との関連という観点から研究を行った。

アイデンティティについて Erikson 自身明確な定義を行っていないが、多くの研究者によって共通していることは、自分自身の斉一性、連続性、を持ち、また何らかの対象に対する帰属性を確信している状態と述べている。そしてそのように形成されたアイデンティティ感を Erikson は心理社会的な安寧感として体験されるとしている。したがって、アイデンティティの達成は発達上非常に重要なものであるが、Marcia のステイタスアプローチが提唱されて以来、そこには分離と独立を基調としているきらいがあった。

しかし、近年アイデンティティ形成において他者との関係性という視点の重要性が挙げられるようになってきた。それは Gilligan のケアの考え方に代表されるような人間関係への文脈的理解、他者への配慮、共感に見られる視点である。それは自分は誰のために存在するのか、自分は誰のために役に立つのかといったテーマの側面であり、分離や独立を個に基づくアイデンティティの発達、ケアに見られるような他者との関係性を関係性に基づくアイデンティティの発達と、アイデンティティ形成を二つの軸でとらえる考え方である。

「個」と「関係性」のという視点に立ったとき、それらの強さやバランスを志向する要因の一つとして価値観が挙げられる。価値観は選択行為に関してそれを方向づけるという機能を持っており、パーソナリティの統合やそれに伴う態度や行動に深く影響していると考えられる。そこで本研究ではアイデンティティ形成について、個に基づくアイデンティティ及び関係性に基づくアイデンティティと価値観の関連を質問紙を用いて調査した。

その結果男性は自立や分離、独立を基調とした個にもとづくアイデンティティの発達が重要なテーマであり、関係性的な視点がそれほど影響しないことが推測された。それは他者のために何かするなど、他者とのかわりにおける関係性的な視点が自己の成長との間に関連が見られなかった点からも推測される。また男性においては関係性に基づくアイデンティティの発達は個に基づくアイデンティティが確立された後に表れることも推測された。女性においては男性同様自立が重要なテーマとして挙げられたが、個としてのアイデンティティの発達のみならず関係性に基づくアイデンティティの発達も自身の成長ととらえていることが示唆された。しかし、他者からの独立といった分離を強調するテーマにおいては自身を成長させる要因としてとらえていないことが推測された。また自立において男性は一人で生活できるようになることをとらえているのに対し女性は新しい家族を持つことも含まれていることが推測され、男性と女性における「個」と「関係性」の認識の違いが示唆された。